

令和6年度 世代間交流による  
防災啓発機会の創出

報告書

2025年3月21日



## 目次

1. はじめに.....	2
2. 年間の計画.....	3
3. 生徒への指導上のポイント/留意点.....	5
4. 協働先団体との連携のポイント.....	7
5. 大学等の支援先との連携のポイント.....	9
6. 進捗状況に合わせたチェック項目等.....	10
7. 令和6年度の高校の取組事例.....	10
コラム-参考事例-	25

## 1. はじめに

本報告書は、高等学校において総合的な探究の時間等を活用した防災教育の取組を通して、世代間の交流を推進するための事例集となっています。各事例を参考にいただき、それぞれの実情に合わせて、学校と地域社会及び世代間交流を促す防災教育を企画・実施するための手引きとなれば幸いです。

本報告書で紹介するプログラムは、高校生が防災に関する基礎的な理解を確認・習得すると共に、地域防災に貢献できるコミュニケーション力やリーダーシップ力を高めることを目的としています。また、地域防災の担い手として主体的に防災活動に参画し、市民社会の能動的形成者としての資質・能力を養うことも目指しています。

紹介するプログラムの特色は、高校生が防災に関する探究活動に主体的に参画することを通じて、地域における災害の歴史や風土について当事者意識を持って学ぶと共に、世代間交流に資する新たな防災教育に向けたアイデアを構想して、これを実施し、かつ振り返るまでの過程を提供しているところにあります。

これらの成果と課題を参照いただくことで、より多くの高校生が静岡の地域防災の担い手となり、災害に備えることのできる防災教育が推進・持続されること、また災害時にあっては、それぞれが復旧・復興を加速させる世代間連携の要としての役割を果たすことができるよう期待します。

## 2. 年間の計画

### ● 目標

防災について「学ぶこと」と「伝えること」の両面を高校生に体験してもらい、自らが暮らす地域の防災情報や特性、子どもの発達段階についても理解を深めながら、子どもたちが楽しみながら学べる防災講座等を企画し、地域や保育施設等で実践することで、地域の理解や防災意識の向上を図ります。

### ● 導入時間の例

- 総合的な探究の時間
- 家庭科「保育体験実習」と連動 等

### ● 指導計画の例（4 時間扱い）

各学校の実情に応じて、時間数を検討し、計画してください。

時	目標	主な学習活動
1	防災の基礎について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"><li>・ワークブックを使って防災の基礎知識を学ぶ（5段階の「警戒レベル」や地域の災害リスクについて、</li><li>・災害時の SNS の上手な活用等）</li> <li>・静岡大学が共同開発した「防災検定ソナクエ」をタブレット等で取り組み基礎知識の習得を確認する</li></ul>

2	調査・企画する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育園や幼稚園等の園児が防災について楽しみながら学べる内容と方法を考える</li> <li>・ 子供のころに遊んだ「遊び」を書き出す</li> <li>・ 地域の防災について調査する</li> <li>・ 子供の発達段階について学ぶ</li> <li>・ 個人で防災と遊びを掛け合わせた「防災遊び」を構想し、企画書を作成する</li> <li>・ 班、グループで各メンバーの企画書を共有し、グループで1つの企画を完成させる</li> </ul>
3	実践する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 企画した防災講座の流れや内容をまとめる</li> <li>・ 地域の幼稚園や保育園等で講座を実施する</li> </ul>
4	振り返る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プログラムで学んだことを振り返り、気づいたことや今後に活かしたいこと、感想を報告する</li> <li>・ 地域の連携先の関係者や防災の専門家を招いて、話し合いを深める</li> </ul>

### 3. 生徒への指導上のポイント/留意点

時	目標	指導上のポイント/留意点
1	防災の基礎について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域の実情に応じた基礎知識を伝える</li> <li>・ 地域の実際については、自治体の発行するハザードマップ、静岡県総合防災アプリ「<a href="#">静岡県防災</a>」（静岡県）、「<a href="#">重ねるハザードマップ</a>」（国土地理院）、「<a href="#">地域防災Web（あなたの地域を知ろう）</a>」（防災科学技術研究所）等で地域の災害の危険性や避難場所等を確認する</li> <li>・ 身近な河川や近年発生した災害等を取り上げ、関心を持たせる</li> <li>・ <a href="#">避難情報に関するガイドラインの改定（令和3年5月）</a>（内閣府）等を確認し、最新の避難情報について伝える</li> <li>・ 各情報メディアの特性を把握させ、「だいふく」（誰が・いつ・複数の情報源）等の標語を用い、SNS等との正しい向き合い方を説明する</li> <li>・ 学習内容の定着を確認するためにタブレット等で「防災検定ソナクエ」に取り組んでもらう</li> </ul>
2	調査・企画する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 園児に正しい避難行動の仕方を知ってもらうために、楽しみながら防災について学べる方法を考えさせる</li> <li>・ できるだけ多くの遊びやアイデアがでるよう工夫し、促す</li> <li>・ 情報の引用元は必ず残すよう指示する</li> <li>・ インターネット調査のみに終わらず、地域での調査やインタビューなど積極的な調査を促す</li> <li>・ 実施する園児の年齢に応じた遊びやイベントになっているかを確認する</li> <li>・ 各自で防災と遊びを掛け合わせた「防災遊び」を考案し、企画書を作成する</li> <li>・ 現実的な実施内容になっているかを確認する</li> <li>・ 班の中で一つアイデアを選ぶ。伝えたい事や明らかにしたいことが明確になっているか確認する</li> <li>・ 連携先の園や協働先との連絡を担当教員とともに進行。</li> </ul>
3	実践する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時間配分を確認し、リハーサルを行い、適宜指導する</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・声の大きさや話し方、姿勢が対象にあったものとなっているか確認する</li> <li>・先方と日程や進行について最終確認をする</li> <li>・実施場所までの行き方や集合時間を確認する</li> </ul>
4	振り返る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践から学んだことをワークブックなどにまとめ、報告し合う。</li> <li>・テーマや伝えなかった内容と実施・調査内容が一致していたかを検討する</li> <li>・実施した防災講座の進行や方法について検討し、改善ポイントについて意見交換を行う。</li> </ul>

## 4. 協働先団体との連携のポイント

本取組を実施する際に、「防災の基礎について学ぶ」、「調査・企画する」、「実践する」、「振り返る」の各段階において、地域の団体と協働して取り組むことで学習が一層深められ、活動の持続性も高めることができます。

「防災の基礎について学ぶ」、「調査・企画する」では、地域の実情や防災に関する情報がある施設を訪問することで、防災に関する知識や理論を習得することができます。

「実践する」では、地域の幼稚園・保育園や小学校・中学校、自治会や自主防災会等の世代を超えた協働先を検討し、連携を通して実践的な学びを体験することができます。

「振り返る」では、協働先や地域で活動する防災関係者と共に、活動の可能性や今後について意見交換し、アドバイスをもとに次の活動につなげます。

### ● 連携先の例

- 地域の幼稚園・保育園
- 地域の小学校
- 防災センター
  - 静岡県地震防災センター
  - 浜松市防災学習センター

- 消防団
- 自主防災会
- 各自治体の危機管理部
- 国土交通省中部地方整備局
- 資料館
  - 静岡市治水交流資料館 かわなび
- 博物館
  - ふじのくに地球環境史ミュージアム
  - 静岡県富士山世界遺産センター
  - 伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」
- 図書館
- 公民館
- 地元の企業

## 5. 大学等の支援先との連携のポイント

- 静岡大学  
→ [教育学部藤井基貴研究室](#)
- 静岡県立大学
- 常葉大学

### 【連携例】



大学生や大学院生、研究補佐員による助言



大学生による防災講座の実施

## 6. 進捗状況に合わせたチェック項目等

	年間指導計画の検討
	目標や目的の明確化
	大学等の支援団体の検討と調整
	幼稚園等の地域組織の検討と調整
	授業日の日程調整
	実践の日程調整
	振り返り会の日程調整

## 7. 令和 6 年度の高校の取組事例

## 東部

### ■静岡県立沼津城北高等学校(1年生)

導入教科:総合的な探究の時間

日程:2024年11月18日~2025年2月12日

方法:防災講話、グループワーク、避難訓練でのインタビュー、プレゼンテーション

生徒から出されたアイデア:

- 災害時、避難所で高校生が幼い子どもや高齢者の遊び相手、話し相手になることができる。
- 家庭科の保育の分野で学んだことを活かして、避難所で子どもと遊んであげたい。
- 高校生は力があるので、避難所に届いた物資を積極的に運び、避難所に貢献したい。
- 高校生は英語を学んでいるので、避難してきた外国人旅行客と積極的にコミュニケーションをとり、外国人の避難生活を支えたい。
- 地域の防災訓練の参加者が増えるようポスターを作成し、啓発活動を行う。

生徒らの感想:

- 自分たちができることを考える機会があって良かった。
- 災害が実際に起きたら実践したい。

## 成果と課題：

沼津城北高校では本活動を通じて、地域および防災への興味関心が高められ、地域連携の構築に向けた素地が形成された。その一方で、取組をはじめて間もないこともあり、学校内での活動に留まったため、今後は学校と地域との協働に向けた体制構築が課題となる。また、事前の学習過程において生徒が探究課題についての理解及び当事者意識の形成が十分に果たされていなかったこともあり、生徒から出されたアイデアが似通ったものとなってしまう、活動後の話し合いが十分に深められなかった。探究学習においてはこうした状況や課題が生じやすく、これらを改善していくためには二つのアプローチが考えられる。

第一は、探究活動の時間を十分に確保することである。地域防災というテーマにあっては基礎知識を習得レベルが、その後の成否をわける。関連して、情報収集の方法についてもインターネットで調べるだけでは情報の差異化が図れず、結果的に企画自体がコモディティ化（平準化）してしまう。生徒が主体的に探究に取り組むことができるよう、多様なリソースを提供し、情報リテラシーの重要性を伝えつつ、総合的な探究の時間のカリキュラム開発及びマネジメントを学校全体で後押ししていく体制を整備していかなければならない。このことは高等学校の特色化とも連動する高校改革の重要な取組の一環をなすものとなる。

第二は、探究活動を進めるための伴走者の量と質の確保及び向上である。同様の取組を導入する際に、初期の段階にあっては地域や専門家等との連携は欠かせない。年度を重ねるごとに伴走者の外部依存を内製化していく体制構築を

目指すとはいえ、探究活動は教授法のダイナミックな転換を伴うものであることから、先行する取組や専門家から「学ぶ（真似ぶ）」姿勢も必要となる。同校の支援にあっては、外部人材の支援は日程の都合もあり、月1回程度の訪問にとどまった。そのため外部人材も状況の変化が確認できず、担任も何を、どの程度支援することが必要なのかが判然としていなかったように見受けられた（外部からの支援についてはタブレット端末を活用したオンラインによる支援も可能である）。探究学習の伴走者をどのように配置し、何をするのか、またいつまで外部に依頼をするのかといった計画や見通しを事前に学年団で検討・共有しておくことは、活動の充実に向けた基盤といえる。学校内での基盤を整えることは、学校周辺の教育機関との連携もおのずから加速させることにつながり、生徒たちに世代を超えた活動や地域と共にある探究学習への道を拓くものとなる。



大学生らによる講話の様子



大学生らによる講話の様子



大学生からアドバイスを受ける様子



グループワークの様子

## 中部

### ■静岡県立駿河総合高等学校(1年生)

導入教科:総合的な探究の時間

日程:9月9日(月)~12月20日(木)

方法:防災講話、グループワーク、防災×遊びの企画、幼稚園での実践、プレゼンテーション

生徒から出されたアイデア:

- 自分の地区の避難場所や避難タワー等、自分の身の回りのことを確認。
- クイズや遊びなど、楽しみながらできるもので興味を引く。
- 家族に避難グッズや食料の備蓄の有無について聞き、足りないものを買い足すことを促し、なぜそれが必要なのかを考える機会の創出。

生徒らの感想:

- 今回の学習をきっかけに自分事として捉えることができるようになった。
- 小さい子たちにも楽しんでもらえたし、自分たちも勉強になってよかった。
- 企画から準備、実施まで多くの時間を活動に割いたが、企画のところが一番難しく、多くの時間がかかった。

- 実際に自分の身に起こったらということを想定しながら考えると、危機感からなのかアイデアが頭に浮かぶようになった。
- 今まで以上にニュースの地震情報や、災害の情報に耳を傾けるようになった。静岡も南海トラフがいつ起こるか分からないので、いつ起きてもいいようにしっかり物資と心の準備をしたい。

### 成果と課題：

駿河総合高校は総合学科を有し、静岡県内でも有数の探究活動の取組を展開している。地域との連携や幼児から高齢者まで世代を超えた様々な活動が企画実施されており、生徒たちの主体性も目を見張るものがある。その一方で近年では探究活動が「マンネリの壁」にぶつかることもあり、活動をいかに多様化させ、学習の質をいかに持続的に向上させることができるかが課題となっている。つまり、生徒の「探究慣れ」（形式化）をいかに崩しながら、新たな学習を展開するかという極めて高度な課題と向き合っている。

このことに関連して、本年度の支援過程のなかでも、生徒のなかには活動の流れを理解しているものが多いこともあり、導入から自分たちで考える立案の部分までの流れはスムーズに進むものの、「大体このぐらいでいいかな」という声が生徒たちの中から聞こえてくることがあった。このことが示すように、一度決めたことを吟味・再検討したり、実演して改善したりする機運に欠けることが課題となっている。

また、200名を超える多人数での活動を、年間を通じて計画的に実施しているため、総合的な探究の活動の時間以外での自発的な取組をどのように促し、支援するかも課題といえるだろう。

今年度の大学生による1年生向けの探究支援にあっては、大学の都合で企画の立案時（初動時）に訪問の時間を割くことができなかつたこともあり、班編成や企画が決定した後に、発表の練習に立ち会いアドバイスをしたり、意見交換に混ざって話を聞いたりという支援が中心となった。そのため、スタートから完成までの過程を追った支援ができず、生徒たちの進捗を見守り、実践におけるリスクを減らすという消極的な支援にとどまることとなった。あわせて保育実習での実演後の振り返りについても、関係者をより多く巻き込んだ活動にできれば、なお充実させることができたと思われる。

駿河総合高校については世代間交流と地域連携が十全に実現されているだけに、今後は伴走するサポーターをより充実させるとともに、担当教員の異動による影響を減らせられるよう、持続的な体制構築に向けた支援と学校内および関係者間での協議を重ねていくことが今後の課題と目される。加えて、同校で防災をテーマとした先進的な探究学習の指導をリードされている先生方のノウハウを、同僚間及び他校とも共有していく場の創出も積極的に検討されるべきであろう。



大学生らによる講話の様子



授業に参加する生徒の様子

## 西部

### ■静岡県立浜松工業高等学校(1～3年生)

導入教科:理科、特別活動

日程:2025年3月7日～3月13日

方法:防災講話、グループワーク、防災施設の視察、地域でのフィールドワーク・インタビュー、プレゼンテーション

生徒から出されたアイデア:

- 地域での過去の災害の聞き取り調査
- 津波避難タワーの実態調査
- 消火器の使い方の伝え方
- 非常食の準備
- ローリングストックでの備え

生徒らの感想:

- 今後の災害に備えて、防災グッズを揃えたり、家にある家具が地震で倒れないように対策をしっかりとしようと思いました。
- 浜松に住んでいて小学校の頃から南海トラフ地震のことを聞かされて怖い気持ちが強かったけど地震対策をしていざというときに大丈夫なようにしたいです。逆に対策をガッチガチにして地震なんて上等だよ。ぐらいの気持ちで過ごせるぐらいにしたいです。

- 日常の色々な場面で起こり得る災害に対する意識が少し変わったような気がします。

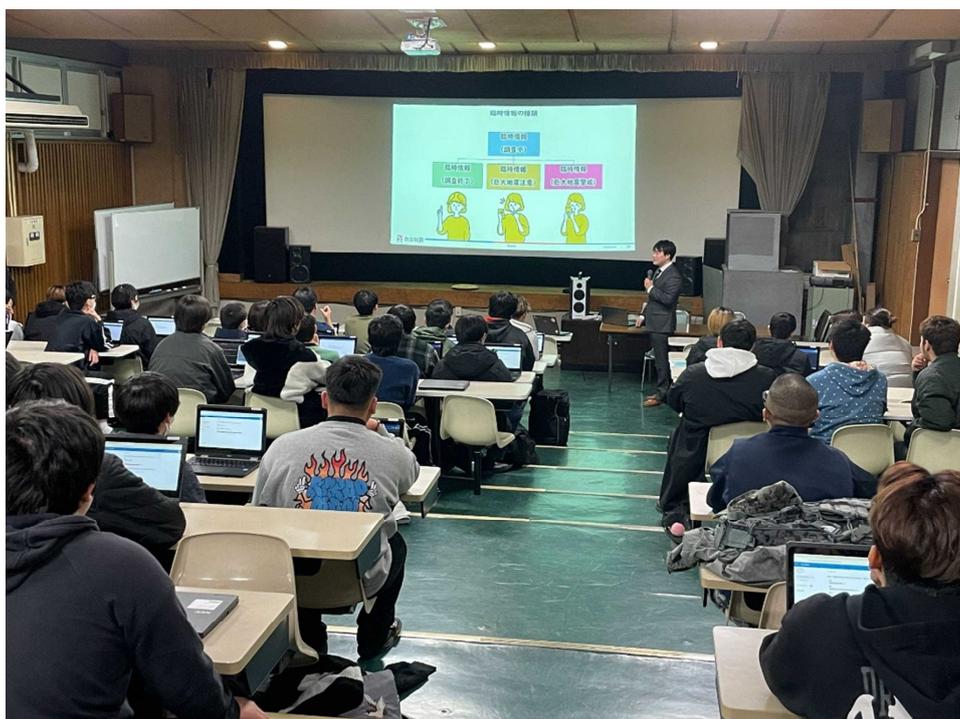
#### 成果と課題:

浜松工業高等学校ではいくつかの特色ある取組が進められている。例えば、修学旅行の一環として防災センターを訪問し、実際の防災対策や災害対応を学ぶ機会を提供していることや、理科の授業を活用して災害のメカニズムなどの防災基礎知識の教育を行い、生徒たちに防災の重要性の理解を促してこと等、教科・領域を横断した取組を推進している点が特筆される。これらの取組は、生徒たちが防災についての知識を深めるための有効なアプローチとなっている。

その一方で、防災探究の活動をさらに発展させるための課題もある。まず、活動時間に限りがあるため、調べ学習に留まることが多く、学習成果の地域への還元や地域での活動をまじえた体験学習につながっていない点などは、他の高校にも共通する課題と言えるだろう。このことに関連して、生徒たちが得た知識やアイデアをどのようなアクションへとつなげていくかについて考える機会の確保やその教授方法の導入が課題といえる。

こうした課題を解決するためには、今回行った支援のように、年間を通したカリキュラムマネジメントを遂行して、テーマを探究する時間を多く取り、探究活動の時間を増やすことで、外部人材も活用した活動を進化・深化させることが重要となるだろう。そのためには、「カリキュラム・オーバーロード」とも言われる現状の中で、教育内容（コンテンツ）の視点だけではなく、資質能

力（コンピテンシー）の養成という視点からも防災教育の在り方を再検討していかなければならない。このことはすでに OECD（経済開発協力機構）なども示しているように、日本および世界共通の教育課題となっており、静岡県においては防災教育を通じた探究活動の充実および世代間連携の促進を通して、この転換に大きな貢献をなすことも可能である。あわせて、こうした教育・学習活動を推進する教員への支援体制及び研修の充実も図られなければならない。



講話の様子



生徒の発表の様子



生徒らによる舞坂地区の過去津波に関するフィールドワークの様子



地域住民へのヒアリングの様子

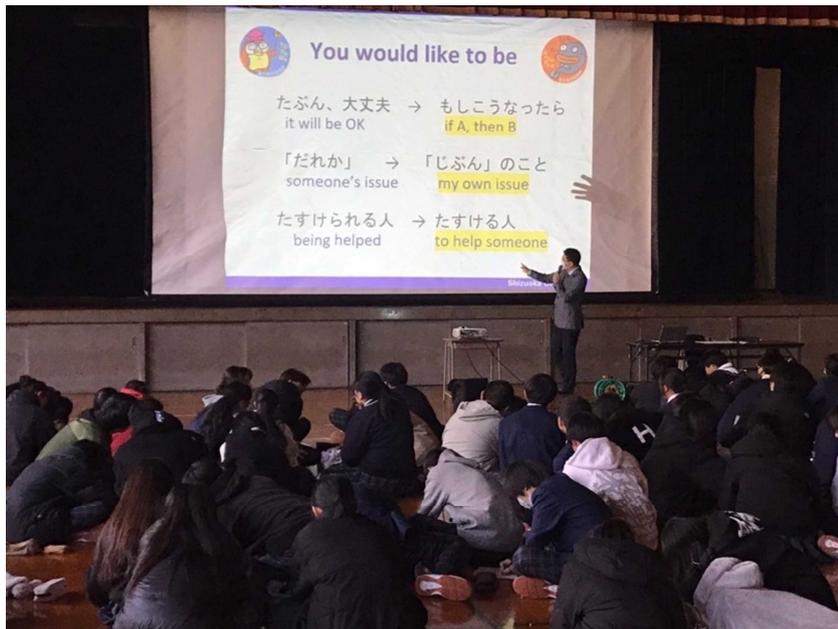
## コラム-参考事例-

## ① 多様なルーツのある生徒がいる高校における防災プログラム

近年では単位制や国際学科などを併設して、多様なルーツを持つ生徒がいる高等学校が増えている。こうした学校にあっては、例えば「やさしい日本語」を取り入れた防災教育を導入することで、学校が目指す教育理念と親和性の高い教育実践を展開することが期待できる。写真の実践校では、導入に防災クイズを取り入れ、その後はやさしい日本語を通して災害時のジレンマについて意見交換するプログラムが静岡大学の教員らによって実施された。こうした取組は国際共修授業の一環としても注目される。



講話の様子



講話の様子

## ② 防災に関する特別な教育コースの設置によるプログラム

防災に関する特別な教育コース（地域防災科、防災コース等）を設置している高校では、より深く防災について学び、実践するプログラムを柔軟に編成することが可能となる。また、「防災」をコアにしたカリキュラム開発を通して、高校の特色化と地域貢献も図ることができる。



ワークショップの様子



ワークショップの様子

### ③ 総合的な探究の時間（「保育体験実習」等）を活用したプログラム

静岡県内では「総合的な探究の時間」（「保育体験実習」等）を活用して防災プログラムを実施し、制作した防災教材を使った防災講座を高校生が企画し、地域の幼稚園や保育園などへ出向いて実演する取り組みが広がっている（静岡大学「BOSAI ユースアンバサダー事業」等）。同取組は本報告書で紹介した実践に先行するものであり、導入のしやすさや世代間交流を促進する利点を備えている。



大学生からアドバイスを受ける様子



グループワークの様子



津波避難タワーへの避難検証の様子

#### ④ 地域の企業・図書館と連携して実施するアンバサダープログラム

上記③と同様の取組として、防災教材の監修を地域の企業に協力を得て、協働で制作する取り組みも推奨される。制作した教材を用いた防災講座の実演にあたっては、保育園や幼稚園だけでなく、図書館や防災センターなどの社会教育施設も可能である。制作した教材（紙芝居、絵本）の精度によっては連携先への寄贈なども検討されてよい。こうした目標があることで生徒の取り組みもより集中力と真剣味を増すことが期待できる。



高校・企業・大学が連携し制作した防災紙芝居『あかるい くらい』



防災紙芝居を図書館で実演する様子  
(出典：島田樟誠高等学校 Web サイト)

※なお、島田樟誠高校の取組は後輩たちにも引き継がれ、紙芝居の英語化などに進展している。